

嫌われ魔術師の俺は  
元夫への恋心を消去する

# Main Characters



イクセル

大樹の魔物として偉大な魔法使い。  
『恋愛感情抹消魔法』の使い手。

オーラ

ロイの別荘に住む麗しい青年。  
元嫁夫の未亡人で、  
ロイとは親密な様子を見せる。

ベルマン

ロイに仕える男。  
大元帥命令と称して  
サラを半ば強引に連れてきた。

ロイ

魔狼の血を引く大元帥。  
若くして戦場で活躍し、冷酷と有名。  
亡くした妻の記憶を失っている。

サラ

元嫁夫の魔術師。  
久方ぶりに故郷に戻ったところ、  
ロイを慰めるよう命令される。

「——おはよう」

声をかけられて、目を覚ました。

まだ、部屋に溢れる光が眩しすぎて、完全には目を開くことができない。

ぼんやりとした意識のまま、声のする方へ視線を向けた。

……貴方は誰だ？

そう囁くと、カタ、と椅子の動く音がした。

そこに座っていた見覚えのない男が立ち上がったのだ。

「まだ、眠つていいからな」

男はそう告げて踵を返す。キイ……と扉の軋む音がした。

正体を明かさない彼の背が白い光の中へ溶けていく。

ここは何処だろう。小さな小屋だ。扉は僅かに開いたまま。小屋にはもう、誰もいない。

あれは誰だったのだろう。思い出せない。心中ぽつかりと穴が空いた心地だつた。その穴に朝陽が滔々と注ぎ込まれていく。何かを忘れているのにどうしてこんなにも温かな気分なのか。

また眠気が増して、俺は目を閉じた。

信じられないほど心地が良くて、あつという間に眠りに落ちていく——……

数々の名前を使つては捨ててを繰り返して生きてきた。三十一歳になつた今、魔法使いとして使つてゐる名前は『サラ』だ。これは過去にただ一人から呼ばれていた名だが、それを名付けてくれた人はもう『サラ』を一切覚えていない。本来なら捨てるべき名前なのだろうけれど、俺にとつては宝物で、とても手放せるものではなかつた。

「おい、起きろ」

「……んー、うう」

子供の頃は日が昇る前から起きているのが常だつた。この記憶は奴隸の頃から始まり、次に娼夫時代まで続く。どれも昼夜が逆転している生活だつたから、今こうして、太陽が燐々と輝く昼前に起床する生活が信じられないほどだ。

叩き起こされてようやつと瞼を薄く開く。窓から強い日差しが差し込み、真っ直ぐ光の矢が、翠の色をした両眼に差し込んできた。あまりの眩しさと眼氣に寝ぼけ眼を擦りながら、「師匠……？」と呟くと、目の前に仁王立ちする男は「お前なあ」とため息と共に言う。

「いつまで寝てんだよ。ちんたらやつてるから客人が来ちまつたぜ」「はい？」

「俺はもう行くからな」

「……え？ 客？」

何の話だ。そんなの聞いていない。この国……祖国であるファルン王国には四年以上ぶりに帰国しただけで仕事を取つた覚えは一切なかつた。

「うまくやれよ、サラ」

「え、師匠。ちょっと」

止める間もなく、師匠は窓に向かつてしまつ。光に吸い込まれるようにして彼の姿が消えていつた直後、扉を激しく打ち付ける音にビクッと肩を揺らす。

「——魔法使いサラ様！ おられますか！」

寝起きの頭ではまだ展開に追いつけない。嫌な予感がするが師匠がすでに応対しているとなると、居留守は使えない。大人しくため息を落とし、上半身を起こす。ベッドの外に足を投げ出して重い足を引き摺りながら扉へ向かうと、その向こうからは、こんな荒屋を訪れるにしては珍しい立派な軍服を着た男が姿を現した。

「おはようございます。貴方がサラ様ですか」

「……いかにも」

魔法使いサラを呼んだということは、さては徴兵か？ だが近頃のファルンは戦争など皆無の平和な国家のはず。明るい茶髪をした若い男は細い目をさらに細くしてにこりと微笑み、「サラ様、お目にかかるて光榮でございます」と完璧な形で礼をする。ひとまず「何の用？」と聞けば、彼は

凜とした声で宣言した。

「大元帥より、魔法使いサラ様を召喚せよとの要請がありました」

「……は？」

聞き間違いを疑うも、その使いはこちらの動搖など想定内であろう毅然とした口ぶりで、再び繰り返す。

「大元帥命令でございます。サラ様は我が国ファルンの国民とうかがっております。ロイ・オークランス様の名の下に発令される大元帥命令はこの国の勅令に等しい。ファルンの同志よ、ご命令にお従いください」

「な——」

突然ぐわっと二本の腕が伸びてくる。掴まれた瞬間、転移魔法を発動された。

男は魔法使いだつたらしい。一度目を瞑つて開けると既にキャビンの中にいた。着の身着のままで馬車に閉じ込められる形になり逃げ場を失う俺の前には、先ほどの使いが腰掛けっていた。

「おいおい……」

「私はベルマンと申します。ロイ・オークランス様にお仕えする身でございます」

当然、ロイ・オーケランス大元帥閣下の名前は知つていて。客間の如く豪勢なキャビンだと思つたらロイの使いだつたのか。

揺れが軽減される魔法が施されているらしく、窓の外で急速に流れる景色とは不釣り合いなほどに車内は静かだ。座席を指で撫ぜただけで分かる。ここを俺の転移魔法で突破するには道具が足り

ない。小さく舌打ちをして室内を見渡していると、ベルマンが告げる。

「率直に申し上げます。我が國の大元帥様であられるロイ・オーケランス閣下にお仕えください」「……何？」

固まつた唇からそれだけが洩れる。視線をベルマンへ移し、低い声で問う。

「何だつて？」

「サラ様はメルス遊郭街の元娼夫どうかがいました。魔法使いの身であり、かのメルス遊郭街にいらっしゃいやつた身。まさしく閣下に適した人材です。サラ様はロイ・オーケランス閣下をご存じですよね？」

ベルマンは手を組みなおすと「我が軍の総大将であられますから」と堂々と言い切つた。

この地にファルン王国軍の最高位、ロイ・オーケランスの名を知らぬ者はいない。二十九歳という若さで全ての軍のトップとなつた彼の名は世界中に轟いているのだ。

それにしてもメルスだと？ いつの、話を……。まさかメルス遊郭街で元娼夫として働いていた過去を持ち出されるとは思わなかつた。すでに三十一歳を迎えた身からすると過去の出来事だ。それに普通の人間は俺が娼夫として働いていたことを知らない。

なるほど。師匠の仕業だな。舌打ちをまた一つ鳴らすと、目の前のベルマンは組んだ指の中指をしきりに撫でながら「サラ様」と続ける。

「急な召喚となり、こちらも心苦しいのです。しかし、につちもさつちもいかない状況でして」心の底から困り果てたみたいな顔をするので、こちらもため息が漏れる。無理やり乗せられた船

だが簡単に降りられそうにはない。俺は窓枠に頬杖をつき、「一応、聞こうか」と足を組んだ。

「これは極秘事項となつてはいるのですが、現在ロイ・オーランス閣下がシェレオ地方で休暇を取られているんです」

「へえー」

「しかし民もご存じの通り、閣下は奥様を亡くされて以降酷くご傷心です」

窓の外へ目を転じると、景色がまた変わつていて。転移魔法を繰り返しているのだ。

「閣下の功績により長年続いていた南境戦争も終結し、近頃は平穏なファルンではありますが、閣下はそうではありません。かなり体調を崩されておりまして、半年間の休暇を取ることになつたのです。奥様を亡くされて以降、閣下は悲しみが尽きませんから」

「ほお」

「ですので、ここは元高級娼夫であられるサラ様のお力を借りようかと」

「何でだよ」

声が荒ぶる。感情の制御が利かず、怒りが溢れた。

「何で俺なんだ」

「閣下は魔狼の血を継いでいます」

……魔狼。狼の魔物だ。ファルンのとある地方には魔狼の血を継承する民族がいる。そのうちの一人がロイ・オーランスであり、彼が魔族の末裔であることはこうして他者に教えていい情報ではないはず。それなのに打ち明けるとは……本気で俺を巻き込むつもりなのだと理解し、思わず

奥歯を噛み締める。

「普通の人間では、閣下に近寄るだけで本能的な恐怖に心を蝕まれ、精神が持ちませんので」

「だろうな。それで俺が魔族に耐性があることを嗅ぎつけたのか」

「サラ様はメルス遊郭街ゆうかくがいにいらっしゃった頃、かなりの売れっ子だったとお聞きします。魔族の末裔の民のお相手をしていたとも。ならば閣下のことも恐れませんよね」

やはりこの状況を作つたのは師匠だ。今はまだ黙つていてやるが、後でめちゃくちゃ怒ろう。

娼夫だったのはもう十年近く前の話でありとつぶくに引退している。年増の娼夫を頼るほどの人手不足と見た。あまりの展開に目眩がする。瞼を強く閉じて、震える声で呟いた。

「なりふり構つていられないほど、閣下は具合が悪いのか」

「目見ればお分かりになるかと。半年間の契約となります。報酬は充分にお支払いします」

「亡くなられたのは奥様、だろう。代わりを務めろと言われても、俺はどこからどう見ても男だが」

眉間の皺を押さえながら指の隙間から睨みつけるが、ベルマンは平然と答えた。

「閣下の亡くなつた奥様は、実は人間の男性だったのです」

「……」

「閣下はその方を大層ご寵愛しておられたので、奥に隠されていましたという意味では、奥様も間違いでありません。私はお目に掛かつたことはありませんが、光を放つ白い肌に眉目秀麗な顔立ちをした、とてもお美しい方だったそうで。しかしさすがメルス遊郭が誇つたとされるサラ様。貴殿もどつてもお綺麗です」

長らくぶりにファルンに戻ってきて早々かなり面倒になつた。帰国したのは昨晩だ。一晩眠ることの何が過ちだつたのだろう。別に俺はこの国に追われている身でもないし、ファルン国民として国籍も所持している。それが悪かつたのか？ 未だ釈然としない気分で唇から溢すよう言う。

「俺とその、亡くなつた奥様とやらは別人だ。それで慰めになるのか」「おいだわしいことに、閣下は奥様を亡くされたショックで記憶障害が発生し、奥様に關することだけ忘却されているのです」

「……何と都合の良い」

「それに魔族の血に耐性がある人間がお傍にいるだけで格段に体調が改善するとうかがつていています」事実、そうなのかもしれない。魔族の血の混じる人間たちは純粹な人間から恐怖を向けられる。彼らはその視線に傷付き、悲しんでいて、俺みたいな危険信号が失せた男に抱きしめられると、涙を溢さんばかりに脱力し安堵していた。ロイにとつての安心は『奥様』だつたのだろう。それを作在ごと失い彼の心は限界がきていた。らしい。

もう少し魔法の腕を磨いていればこの馬車を突破できたのだが、所詮娼夫上がりの魔法使いである。ロイの側近の魔法使い相手では圧倒的に魔力が足りない。馬車に閉じ込められた時点で負け戦だつたのだ。

窓の外に目を遣ると、またしても景色が転換していた。

半年間、か。大元帥命令に叛くわけにもいかないしまだ死にたくはない。どうせ今は暇だ。諸々、

状況を確認するためにも留まるか。

「俺に会つたつて、何が起きたこともないだろ……大元帥閣下はかなりの堅物とお聞きしている」「確かに、閣下は公妾もおらず、亡くなつた奥様のみを愛されておりました」

「そんな一途で、高貴なお方にどうして俺を近づけさせるんだ」

「魔族の血に耐性を持つ方は貴重です。閣下の身の回りのお世話などをされるだけでも……」「他に、ロイ・オークランズ閣下を元気付けられる人間は？」

軽く首を傾げて聞くと、ベルマンは数秒沈黙し、頷いた。

「お一人だけ、長年閣下にお仕えしているオーラという人間がいらっしゃいます」

「いいじやないか。そいつは閣下の恋人ではないのか？」

「いいえ。彼は未亡人ですが、閣下の恋人ではありません」

驚いて声が飛び出そうになるのを堪えるも、「亡くなつたのか」という声は掠れてしまつた。

「お可哀想、に」

「閣下に最も近しい人間はオーラ様ではあります、彼は既に魔狼の血族と番つておりまして、閣下とは交われません。その点、サラ様は問題がないでしよう」

「まあ俺なら、閣下と、交わることくらいできるだろうけど」

皮肉めいた口調になるも、ベルマンは気にした様子もなく、単調に続ける。

「お姿もとてもお美しい。奥様は琥珀色の瞳を持っていたそうですが、サラ様の翠の瞳も煌めくようです。きっと閣下も気に入るでしよう」

俺はそうは思わない、という内心は口にしなかった。これ以上くだらない応酬をしていても何の益にもならない。たつた半年の付き合いなのだ。

「どうせさ、大元帥命令とは名ばかりで、閣下のご意向ではないんだろ」

ベルマンは答えずに笑みを深めた。沈黙は肯定だ。俺は軽く目を閉じて、逡巡した。

「……条件がある。俺が魔法使いであることは知られてかまわないが、転移の魔法使いであることは内密にしてくれ」

「はい。承知いたしました」

ベルマンは事情を聞くことなく頷いた。

瞼を開き、移ろう景色をぼんやりと眺めてみる。雲一つない青空が眩しすぎて目眩がする。

閣下の御身の安全が第一だ。魔法使いであることは把握されていても構わない。だが、転移魔法を使えるとは知られたくない。これはいざとなつたとき、彼から逃げるための手段なのだから。

転移魔法だけでなく防御を突破できる破壊魔法も極めておけばよかつた。そうすればこんな馬車から消え去ることくらい造作なかつたのに。窓枠に肘をつき、壁に寄りかかる。寝起き早々こんな目に遭うなんて誰が予想しただろ。ぼそっと吐き出した声は自分でも驚くほどに頼りない。

「閣下は、俺みたいなのが現れても嫌悪するだけだと思うけど……」



「——ファルンに栄光を」

片方の膝を折り、深く頭を下げる。大理石の冷たさが服越しに伝わってきた。

応接室に張り詰める緊張感のせいでの、朝からずつと続く目眩がさらに強まつた。息がしづらく、今にも倒れそうなほどだ。

どれほど時間が経つただろう。つむじに、ゾツとするほど冷酷な声が降つてくる。

「貴様が例の男か」

「サラと申します」

床に己の声が反響した。近距離で跳ね返り、耳の奥でこだまする。

偽名を使わずにこの名を口にしたのは、一種の賭けでもあつた。

もしこれをロイが耳にして少しでも異変があつたなら、直ちにこの場を去らなければならぬ。

「サラ、か。覚えがないな」

しかし馴染みのあるあの声は、知らない残酷さを纏つて容赦なく襲いかかつてくる。

俺は誰にも分からぬよう唾を呑み、燃えるように熱い息を吐いた。

茶髪の髪が垂れ下がり、俺の横顔を辛うじて覆つている。気付かれぬよう強く目を閉じた。

「その名がどれほど遊郭街で影響をもつか分からぬが」  
瞼の裏が焼けるように痛い。その声のあまりの冷徹さに、心臓が大きく脈打つ。  
だとしても声を、聞き届けたい。

「失せろ。お前のような卑しい者など必要としていない」

思わず口元が緩んだ。にやけた唇を隠すため頭を下げ続ける。

「俺の亡くなつた妻が男と知り、のこのこやつてきたのか？」

顔を上げずに黙する俺に対し、ロイが苛立つてため息を大袈裟に吐いたのが分かつた。布の擦れる音がする。ロイの歩き方はやはり高貴で、この部屋を去るときでさえ、微かな足音が響くだけだ。

去り際にロイは、怒りに満ち満ちた声で吐き捨てた。

「目障りだ。俺の前から直ちに消えろ」

——ほらな。こうなるだろうと思っていた。

本当に、こうなつてくれるとは。

◇

「サラ様、申し訳ありません。閣下は疲労により、少々気性が荒くなつております……」

俺は案内された客室のソファにだらしなく腰掛け、「荒ぶつてたなあ」とだけ単調に感想を口にする。別に、彼の対応への怒りはない。むしろロイの怒りを理解できる。頼んでもいらない娼夫を寄越されたのだ。プライドの高いロイが腹を立てるのは無理もない話だった。

「サラ様どうか、お気を悪くなさらぬでください」

ベルマンが心から申し訳なさそうに頭を下げるの、慰めるように「まあ、難しい問題だよな」

と返事とも言えない言葉を曖昧に返してから、スッと息を吸う。

「……一人にしてくれないか。夕食の際には、今後に関して聞くから」

「感謝いたします」

ベルマンが去り、一人になつた部屋で、ふう、と全身の力を抜く。ソファに横たわるともう起き上がりなくなつた。睫毛だけが細かく震える。心の底がまだ揺さぶられている。気を悪くしたというよりロイと対面して改めて思い知つただけ。

——『奥様』の記憶を失くしたロイは、その奥様本人である俺を前にして、やはり忘れたままらしい。

「……ロイ」

瞼の隙間から涙が滲み出でてくる。涙なんてずっと昔に潤れたと思ったのに、思いの外、まだ溢れるらしい。唇の裏を噛み締めて、今にも叫び出してしまいそうなこの行き場のない感情を必死に押し込める。息が小刻みに乱れて、心の中がとつ散らかる。問題は、どうしたつて俺だけが、俺を忘れてしまつたロイへの愛をまだ胸に残しているということ。

愛し合つた時間に今でも尚、焦がれてしまう。つい今方に香つたロイの匂いが息が詰まるほど恋しい。ロイの声を聞いた時、愛おしさが胸いっぱいに充満した。

侮蔑的な口調などしても『サラ』と名を呼んでくれた。『愛』の意味をもつサラという名前は、かつて俺にロイがつけてくれた名前だ。

サラは、ロイだけが呼ぶ愛称だった。だがそれを今のロイは知らない。この狂おしいほどの感情

の嵐が、どれほど奇跡的で、幸福であるかということ。

お前は知らないんだろうな。

## 第二章 サラの出発

朝食とも昼食とも判別し難い食事を用意している最中に、屋敷の使用人に教えてもらった。五年前まで『奥様』と暮らしていた頃は、ロイも朝早くに起きて、二人で朝食を楽しんでいたと。バルコニーでの柔らかい空気の中、一人だけの時間を過ごしていた。朝から晩まで寄り添つて慈しみ合っていたらしい。しかしそれらは全て伝聞で、ロイの城で仕事をする者は誰も奥様の姿を見たことがないようだ。

だろうな、と思う。俺もロイの『奥様』として暮らしていた時の使用人をここで見かけたことがない。しかし噂は殆ど事実だ。結婚していた時は、ロイが俺のために建ててくれた特別な屋敷で暮らし、暇さえあればロイの傍にいた。九年前にロイと結婚し、五年前に彼のもとを離れるまでずっと。それはロイ・オーケランズ大元帥が住む城とは別の屋敷だ。彼の城は山の中腹に建つており、城の近くには小川が流れていて、その向こうに俺の屋敷があった。戦争中はあまりにも敵が多かつたので、ロイは俺を守るために秘匿魔法が施された特別な屋敷を建てたのだった。限られた者しか見つけられないその屋敷には数人の使用人が住んでいたが、彼らは襲撃で皆殺しにされている。当時から彼らより話を聞いていた城に仕える使用人が、俺とロイの話を言い伝えているようだ。

外部の目から隠されたあの屋敷は今、どうなっているのだろう。存在すら忘却された輝かしい邸

宅は、幽霊屋敷となつてゐるのだろうか。

ロイすらも俺を忘れてしまつたのだから、俺たちの痕跡はもうどこにも残つていない。

「オーランス様、朝食の準備が整いました」

仕事を全うすべくロイの部屋の扉を叩く。頼まれたのは、身の回りの世話だ。

ベルマン曰く、今回の休暇に連れてきた使用人たちはただの人間ばかりらしい。ロイの城には魔族の血を引く人間も多いが、現在は、その殆どが同族の棲むピテオ地方の地震災害の復興に駆り出されている。残つた純粹な人間の使用人たちは、基本的にロイのような魔狼族の血を引く者を本能的に恐怖する。ロイの体調不良と精神の不安定さから、最近は特に彼に恐れをなし、体調まで崩す使用人が出てきたとのこと。それで急いでいたようだが、だからつて耐性のある元娼夫を呼び出すなどかなりの荒療治である。確かに遊郭の民は秘密保持に精通している。あの街では頻繁に政治的会合が行われるほどに遊女や娼夫は口が堅い。秘密を漏らせば命はない生活だつたのだから当然である。

だがロイはそうした身売りを好んでいるわけではない。きっと『奥様』が娼夫であつたと知る何者かが、この提案をしたのだろう。

それはベルマンなのは分からぬが、少なくともロイの機嫌は回復しないので失策だ。

「……お前」

時間が空いて、扉の向こうからロイが姿を現した。

黒い前髪から琥珀色の目がこちらを見下ろす。懐かしいその目に、心が締め付けられる。

……ロイだ。

ロイはローブを一枚羽織つただけだつた。目の前に立たれると背が高すぎて見上げなければならぬ。俺は静かにロイを見つめていた、のだとと思う。そつと洩らした吐息さえ震えてしまう。心は歓喜に満ち溢れて、気を抜けば彼の名を呼びそうだつた。もう一度ロイの姿を目にするこそこそが本望だつたのだから。

そつと。髪を切つたんだな。昔は伸ばしていたけれど、戦争が終わつたからその必要も無くなつたのか。その目はまるで夕焼けの空が広がつてゐるみたいな琥珀色をしている。俺の本当の目も同じ色だから、昔は『同じ色をしている』と互いを優しく見つめていた。

あまりに綺麗だから、自然と笑みが口元に滲んでしまう。しかしロイは冷たく言い放つた。

「何を笑つてゐる」

彼はもう、同じ色の目を知らないのだ。

俺は咄嗟に俯き、また顔を上げると、今度こそ微笑みなどない無表情で告げる。

「いえ。朝食の用意ができました」

「オーラはどうした」

軽く目を伏せて「お休みにならでいます」と答えるもロイは頑なだ。

「オーラを呼べ」

「しかし……」

「俺に口答えする気か?」

台詞に反してロイの声音に怒りはなかつた。冷徹さだけが潜む、凍てついた声。

「休んでいる、か……お前がオーラに何かしたのか？」

警戒心が強いところは変わらない。一回りも体の大きなロイがグッと近づいてくる。逞しい筋肉に覆われたその体からは、霸王独特的の威圧感が放たれていた。これには何年過ごしたとしても慣れない人間も多いのだろう。その中でオーラだけがロイを恐れない。だからロイは重宝している。

「俺は何も」

「悪いが信用できないな。お前はここにいるべきではない」

確かにオーラは、儂い雰囲気を纏う美男子だ。昨夜に見た、夜闇の花園に浮かぶ線の細い姿を思ひ浮かべながらも、「いいえ」と小さく呟く。

「俺みたいな者が、オーラ様に近寄るなど」

「黙れ、オーラの名前を呼ぶな」

今では唯一自分を恐れずに大切にしてくれるオーラを、ロイもまた特別に思い遣っているようだ。俺だって、分かっている。早く朝食の支度をしなければならない。けれどどうにも次の言葉が浮かばない。頭がぼんやりして、胸がとてつもなく苦しい。

「何だ、顔を上げないのか」

するとロイが嘲笑うように吐き捨てた。

「自分から近づいてきたくせに、俺が恐ろしいんだな。この血は氣味が悪いだろう」「いえ」

俺はグッと首をもたげ、あの琥珀色の夕焼けが潜む瞳を真っ直ぐに見つめた。

「俺の体は耐性があるんです。オーラ様を恐ろしく感じるなど絶対にありえません」

ロイの瞳が微かに震えるのが分かつた。小さな沈黙が流れる。数秒後、「ああ」と息を捨てながらロイは言つた。

「魔族の子らをも、呪え込んだか」

侮蔑の目と、嗤笑の声色が降りかかる。軍王としては綺麗すぎる顔を歪め、鋭く睨みつけてきた。

「俺に近づくな」

ロイはサッと踵を返した。

「何をやつている。さつさと去れ」

その背中越しでも分かる。この身に向けられる殺意に近い嫌悪を。

「オーラを傷つけたら、お前を殺すからな」

立ち尽くす俺に最後のセリフをぶつけたロイは、容赦無く扉を閉める。大きな音と共に扉が閉まつてからようやく指先を動かすことができた。唾を飲み込み、踵を返す。震える吐息を必死に堪えながら廊下を進むと、やがてベルマンの姿が見えてきた。

「どうでしたか」

「ダメだな。オーラ様を呼んでくれ」

につっこりと報告すれば、ベルマンは眉を下げる、がつかりとため息を吐いた。

「申し訳ない。俺が来てもあまり意味がなかつたようだ。それにしても、確かに具合が悪そだ」

朝であることを度外視しても、あまりにも顔色が悪かった。邪魔者を手取り早く追い払うための雑な暴言だったようにも感じる。

「まあ、後のこととは任せた。今日のオーケランス様は、オーラ様とお散歩だか何だかだろ。また夕方に呼んでくれ。お、美味うまいな」

案内された控えの部屋には俺の食事が用意されていた。「お好きにお召し上がりください」とベルマンは言つて、すぐに部屋から立ち去る。彼の歩き方に僅かな既視感を抱きつつも、ひとまずソファに腰掛け、豪勢な食事の数々を適当につまむ。

ロイが俺を思い出す兆しはなかつた。うまく魔法が作用しているようだ。

……まさかロイにあんな態度を取られる日が来ようとは。

警戒と侮蔑の色しかしない目だった。普通の人間ではどうにもできないのは納得だ。正直、俺だつて自信がない。今のロイへ俺が奉仕するのはどう考えても不可能だ。いくら魔法使いといえど、彼に殺意を向けられて生きて帰つて来られるとは思えない。

「それにしても、ゆるいな」

ここはロイ・オーケランスが所持する屋敷だ。バルコニーからは海が一望できた。ビーチも何もかもロイのモノなのだろう。別荘としては景色もいいし最適な場所だが、戦闘の意味では向いていない。海岸は厄介だ。敵が海からやつてきた際に気付くのが遅れてしまう。屋敷にかかっている防衛魔法も戦時中と比べて弱い。戦後で警戒心が弱まっているのだろうか。それとも、ロイにはもう守るものなどないのか。

「後でしつかり補強しよう」

流石にこれは見過せない。腐つても俺は、大魔法使いイクセルの弟子なのである。

イクセルはこの国が誇る最強の魔法使いだ。訳あって俺は彼に師事しており、帰国するときは師匠のもとへ必ず顔を出す。結局昨日の朝から今まで一切接触がないのを鑑みるに、この件の差し金は師匠だろう。その意図は分からぬが、昨日の朝に迎えに来たベルマンと繋がっているはず。ベルマン……彼がロイに仕え始めたのは五年前より、もつと前なのか、以降なのか。ロイ・オーケランスに近しい者の一人なので魔族の血が流れているのかもしれないが、人間の血が強すぎるらしくあまり感じない。

「ま、いいや」

俺は俺にできることを考えよう。

まずは、屋敷全体の防衛魔法を強めて、海岸を警戒しなければ。



灯台がないので、夜の海は真っ暗闇だ。こんなに無防備な屋敷に住むなど居心地が悪くて仕方ない。海……の傍に住んだことはない。俺はいつだつて山にいたから。庭を散歩しながらさざなみの音に耳を澄ませていると、途中でロイ、それからオーラの姿を目にした。二人はベンチに座り、ポツポツと落とすように会話している。不思議な空気が漂っていた。

ロイが心を許しているのが見て取れる。

オーラは綺麗な男だった。ブロンドの艶めく髪に、桃色の瞳。その肌の白さが夜だと一層顯著に浮き上がっていた。遊郭出身の俺から見ても、彼のように美しい男はそういないと断言できる。

隣にいるロイはオーラを守る剣士が如く体も大きくて、二人並んでいると、まるで絵画のようだ。

その時、オーラが突然視線をこちらに向けてきた。

桃色の瞳が俺を捉えると、まん丸に見開かれ、揺れたのが分かつた。それから唇を噛み、睨みつけんばかりに見つめてくる。泣き出しそうな顔をするからロイがオーラの視線を追つた。

ロイと視線が交わる。その瞬間彼の表情を怒りが支配した。

「お前……オーラに近づくなと言つたろう！」

怒声が夜を打ち破つた。思わず一步後ずさるも、立ち上がつたロイが大きな歩幅であつという間に追い詰めてくる。背後のオーラは先ほどとは一転して冷めた視線を向けていた。あからさまなその表情に、もはや呆れてしまう。

「なぜここに来た」

「夜の、散歩をと」

まさか海辺に防衛魔法を張ろうとしただなんて言えない。道具にしている指輪を隠すため咄嗟に手を後ろへやるが、ロイは見逃さなかつた。

「何を隠した。お前は魔法使いだと言つっていたな……まさか、オーラに何かしようとしたんじゃないだろうな」

「なぜここに来た」

「夜の、散歩をと」

まさか海辺に防衛魔法を張ろうとしただなんて言えない。道具にしている指輪を隠すため咄嗟に手を後ろへやるが、ロイは見逃さなかつた。

「二度と出歩くな。ここはお前の家じやない」

その身を切り裂いてくるような怒声に、咄嗟に声が出なくなる。

「姿を現すな。オーラはお前とは違うんだ。魔族の民の精を注ぎ込まれたお前に彼が怯えている。近づかないでくれ」

「も、うし訳ありません」

さらに後退するがロイは迫らない。代わりに声だけで押しやつた。

「さつさと去れ」

これ以上ロイを刺激するわけにはいかない。言われた通り立ち去る間際にオーラをチラリと盗み見る。彼は不安そうな暗い表情をしていた。涙もろい男なので、この一連を前に泣き出すのではど心配になるも、その目つきは案外鋭い。目を逸らすと同時に、ロイが「オーラ」と呼ぶ声が聞こえた。直後、背を向けたこちらにも聞こえるほどに凜とした声でオーラが告げる。

「僕は平気です。貴方がいてくれるなら」

美しい声だった。力が抜けてしまいそうなほどに。

なんとか己を叱咤し、庭を抜ける。与えられた部屋に戻つてからドバツと息を吐いた。彼らのもうとを離れれば離れるほどあの言葉が強く頭の中に響き、目の奥が一気に熱くなつた。ダメだ。泣く資格なんて俺はない。ロイを刺激しないためにもオーラには近付かないようにしなければならないが、この分だと向こうから接触がありそうだ。

「……酒でも飲もうかな」

部屋は豪勢で、ワインも数本置かれていた。そのうちの一本を選び、グラスを一つ持つて、さてどこへ行こうと考える。

監視のためにも海を眺めたい。まだロイたちは庭にいるので、彼らに見つからぬような場所がない。適当にうろつくもさすが屋敷は広かつた。そのうち三階の端にちょうど良いバルコニーを見つけ、設置されていたテーブルにワインを置き、椅子に腰掛ける。

月光が眩いので魔法がなくても充分だ。海は真っ黒で、うごめく大地のようだつた。さざなみが聞こえるような、幻聴のような気もする。

……それにしても平和な時代になつたものだ。

南境戦争が開戦し、数ヶ月で終戦締結が結ばれてからもう四年が経つ。

南境戦争は、我が國ファルン王国の南の国境に隣国トウーヤの革命軍が侵攻してきて起つた戦争だ。革命軍といえどトウーヤ本国では実質的に政治を掌握した殺戮軍隊だ。民間人にも平気で銃を向け、民家や人々が逃げ込んだ森に爆弾を投げていく軍隊。あの戦争では両国にかなりの犠牲者が出了た。ファルンもトウーヤもそれぞれが大国だつたことにより、他国では代理戦争を模した侵略や争いが勃発した。南境戦争があと数ヶ月延びていたら、確実に世界大戦が起きていたと言われている。

そうなる前に戦争を終わらせたのがロイだつた。

南境戦争が起つたのは、ファルンの国境にあるピテオ地方である。ピテオ地方は長年トウーヤ

の蛮行で犠牲者が急増しており、誘拐も日常茶飯事だつた。

そしてロイの故郷でもある。ロイは故郷とファルンを守るため、そして世界を救うために戦つた。

「……美味しいな」

ワインは美味しかつた。平和な夜空の下で呑む酒は格別だ。

ファルンに帰国したのは一時的なもの、となるはずだつた。少し用事を済ませてから直ぐにでも出る予定だつたのに。夜空を見上げるが何の報せもない。イクセル師匠は最高峰の変化の魔法使いでもあるので、鳥に扮してやつてくることもお手のものだ。一体師匠は俺をロイのもとに放置してどういうつもりなのだろう……。ロイ・オーランス大元帥閣下の命令を避けられなかつたのか？いや、それはない。あの人に敵う魔法使いはファルンには存在しない。

ではなぜ……考えるもふつと吐息を洩らして「違うな」と独り言つ。単純な話で、師匠は面白がつてゐるだけなのだろう。

ある意味無理やり派遣されて良かつた。あの悲劇をロイがすつかり忘れていると確認できたのだ。俺もこの数年で歩き回れるほどには充分に回復したし、具合の悪いロイへ、こつそりとエネルギーを分け与えることくらいできる。

「サラ様」

すると名前を呼ばれたので横顔だけで振り返る。気配には気付いていたが、やはりベルマンか。

「良い夜ですね。晩酌ですか。ご一緒しても？」

「ああ。だが、グラスがない」

「ここにありますよ」

ベルマンは片手をくるつと回す。次の瞬間にはその手にグラスが握られている。

雲一つない夜空に浮かぶ、丸い月から落ちる光は眩い。グラスに白ワインを注いでやると、その芳香に導かれてベルマンは軽く首を傾げた。軽く掲げ合って、互いにグラスを傾ける。月光の滲むワインを一口含んでから彼は言った。

「満月が続くせいでしょうか。閣下の体調が芳しくありません」

「魔狼の血は満月に影響されるらしいな」

「ええ。もう数日経てば、閣下もサラ様へもう少し常識的に接するかと思われます」

軽い毒を吐いていることに自分で気付いているのか？ ベルマンは平気でロイの発言を暴言と認めている。肝が据わった魔法使いだ。二十代ほどの若い見目をしているが、一体いつからロイの傍にいるのだろう。城に勤めていた者なら、俺が知らないで当然だけれど。

「君はいつからオーケランス様に仕えているんだ？」

「六年ほど前です」

俺がロイのもとを去ったのは五年前だ。なるほど、あまり被つていなかつたのか。彼を知らないで当然だ。納得し、グラスの縁に口をつける。ベルマンは滔々と続けた。

「私はピテオ地方の出身です」

俯きがちに「地獄を見たということか」と問うと、ベルマンは氣弱に微笑んだ。

「地獄でした。私たちの一家は、初期の侵攻の際逃げ遅れてしまい、防空壕に逃げ込んだのです。

妹と祖母は防空壕に辿り着くことすら叶わなかつた。母は彼女達を助けるため外へ出て、帰つてきました

「そうか」

「やがて爆発は近づいてきて、父が私に覆い被さりました。ファルンの魔山軍隊に助け出された時、父はもう死んでいました」

魔山軍。それはロイが初めに大将に任せられた軍隊だ。

「そこで、閣下に会いました。あの人は子供だった私を助け出して、父の遺体を見捨てた」

ベルマンはまるで記憶を読むように言葉を紡いでいく。

「すまない、と何度も繰り返しながら私を安全な場所まで運んでくれました。みんなは魔山軍の将軍を悪魔だと恐れていたけれど、散らばる遺体に決して目を向けず唇を噛み締める閣下が悪魔だなんて、私には思えなかつた。やがて閣下は全軍の総大将、大元帥となられました。私は体が弱かつたので軍隊に就くことはできなかつたけれど、魔力があつたので、閣下のお城に勤めることになつたんです。私には魔狼の血が少しだけ流れているので、従者としてちょうど良かつた」

「なるほどな」

「城の皆は家族のように接してくれました」

ベルマンは、本当に嬉しそうに微笑んでワインの水面を見つめた。俺はベルマンの指の動きを眺めている。その指の根元を撫でるような、小さな仕草を。

「城には私のように戦火に巻き込まれた人たちや、革命軍に人質に取られるも閣下の軍隊に助け出

された者もいた。ファルンの民だけでない。ファルン国以外に住む魔族の末裔は差別に晒されながら生きていたので、祖国からファルンへ逃げてきた子もいました

「俺は黙つてワインを口に含む。

「閣下がそうしてファルンの国民や同志たちを救うのは、あの方が奥様に愛されていたからでもありました」

白ワインは月明かりに透けて、煌めいていた。

「魔狼の末裔である閣下は、人間の奥様に目一杯に愛されていた。だからこそ人間も魔族の民も救うことができたんです」

「まさか、閣下の奥様が、殺されるなんて」

そこで彼の表情がサッと暗くなる。ベルマンは目元を苦しげに痙攣させて、掠れた声で呟いた。

「揺れる吐息を誤魔化すようにワインを口に含む。つい今し方飲んだよりも、苦く感じた。

「申し訳がない。奥様を戦争に巻き込みたくなかった。俺たちの力が及ばなかつたのです。あんな悲劇があつていいはずがないのに」

「オークランス様は奥様のご遺体を見たのか」

「おそらく。そのショックで記憶がなくなつています」

「ああ、そういう……」

「それから閣下は戦争を終わらせました」

「どうやつて?」

「はい?」

ベルマンは目を丸くした。彼の顔に困惑が滲むのを確認し、俺は肩を下げて笑みを描いた。

「何でもない」

「はあ……」

「何にせよ、君が悔やみ続ける必要はない」

「でも俺たちは……私たちは奥様を守りきれなかつた」

「亡くなつたのは君たちのせいじゃない」

「なら誰のせいだつて言うんですか」

「戦争だろ」

俺は囁いて、真っ黒な海を眺めた。

「奥様もファルンの国民だつたんだ。いくらオークランス様の妻だからつて、一人だけ楽園にいるなんて無理だ。誰も逃れることなんてできないから」

一人だけ逃れようなど虫の良い話だ。

目を凝らして海を見つめる。奈落みたいな黒が広がつていた。落ちたら終わりの穴のよう。

「だが特に異常はない。ベルマンへ微笑みかける。」

「奥様の記憶が残つていたら災難だつたな。無くなつていて、ある意味幸運だつたんじゃないかな」と冷めたお考えを

「俺に何を求めてるんだー」

「……確かに、メルス街の方で、今は魔法使いですもんね」

「長くない人生なんだから肩の力を抜いていこう。それに、意外と救いみたいなもんはあるんだ」「救いですか？」

「そう。どうしても後悔することが多すぎて、もうその感情を消し去りたいと願った時、一つだけそれを可能にする魔法がある」

「ベルマンは「ああ」と閃いた顔をして頷き、その名を口にした。

「『イージエン』ですか」

有名な魔法だ。御伽話の世界で描かれるような、殆ど伝説と化した魔法である。

「感情を消す魔法ですよね。噂では聞いたことがあります。まさか実在するとも言うんですか？」

「あると考えた方が救いがあるだろ?」

「贝尔マンは不思議そうな顔をした。夜風が海の方へと流れしていく。

「どうしても抱えきれない感情を捨てることができたら、感じやないか」

「贝尔マンは考え込んでいたが、やがて吐息と共に「そうですね」と告げた。

「閣下は感情どころか、記憶すら忘れています」

「あー……彼は偶然なんだろうけど」

「もしもイージエンが実在し、奥様を亡くした記憶が失われていなかつたら、閣下はその愛を消すために使つたのでしょうか」

「さあね。俺は」と一度言葉を区切つてから続けた声は少しだけ弱くなってしまった。

「俺には分からぬ」

「私は閣下は使わぬと思います」「

「酷だなあ」

「あのお方は本当に、奥様を愛されていましたから」

「へえ。今は、オーラ様がいるだろ」

「贝尔マンは難しい顔をして、押し黙り、やがて呟いた。

「確かに閣下はオーラ様を大切にしてらつしやいます。長年仕えている人間ですから。けれどどうにも……オーラ様は、たまに、不思議な雰囲気を醸すので。閣下に大切にされながらもどこか冷めた目をされます

「……」

「私はあまりあのお二人の関係が掴めていないので」

「オーラ様は未亡人だと言つていたな」

「ベルマンは一度ワインを飲み「ええ」とゆつくりと続ける。

「オーラ様も魔狼族の末裔と番つておりました。なので閣下と番うことはできません。もしものことが起きれば、オーラ様は死んでしまいます」

魔狼の血が流れる民と番つた人間は、他のいかなる者とも番うことはできません。他人と性行為に及ぶとその人間は死んでしまう。つまりオーラは口の恋人にはなれない。

だから魔狼族の末裔は恐れられる。

「……まあ、その点に関して言えば、俺は大丈夫だ」

「そうですよね。魔族の血を継ぐ人々はメルス街にも客として訪れたでしようけれど、魔狼族の方なんて、滅多にいませんもんね。よかつた。一応は危惧していたのです。サラ様が、魔狼族の末裔の方と番つていた場合はどうしようかと」

笑うだけにして返す。少し酔つたのかベルマンは、口調を強めた。

「サラ様、決して番えと申し上げているのではありません。どうか人間であるサラ様が閣下のお世話をできればと」

「お世話？なるほど。魔狼の血の者は発散することもできないなんて可哀想に。咥えてやるだけで気分が違うだろうな」

「なんて下品な！」

「えっ、君が言つているのはそういうことだろ？」

「違います！」

ワインボトルがずいぶん少なくなっている。手酌しているなとは思つていたが、ベルマンはかなり飲んでいたらしい。

「閣下には人間の愛が必要なんです。閣下には、サラ様が必要だ……」

「……しかしロイの一番の愛は、故郷や国へ向けられているはずだ」

囁くように言うと、ベルマンは聞こえなかつたのか眉間に皺を寄せる。俺はにつこりと微笑んでグラスの残りを飲み干した。

その後すっかり酔つ払つたベルマンを部屋まで送り、俺も自室へ戻つた。ベッドに横たわりふうと瞼を閉じる。

仕えろと言われても……。ロイの反応を見るに、オーラ以外の人間が自分に近付くことを良しとしないご様子だ。

思い出すのは出会つたばかりのロイだつた。

——初めて彼に出会つた夜、あの子は人間の姿をしていなかつた。

魔狼の姿に戻つているところをただの娼夫だつた俺が見つけたのだ。

月明かりに照らされて、黒い毛並みが銀に輝く。琥珀色の瞳に魅せられて息すら忘れてしまつた。あの頃のロイもまた俺を警戒していて、怯えるように睨みつけてくる幼い目が忘れられない。

今のロイは警戒だけでなく明らかに嫌悪を示している。振り出しどころかマイナスの位置に戻つてしまつた。失つたものは取り戻せないから、もう、ロイからの愛を受けることはないのだろう。だとしても……俺は、もう一度出会えたことが何よりも嬉しい。

もう二度とロイが俺を見てくることはないと思つていたから。どうしてこの状況になつているのかちつとも理解できないが、ただ嬉しい。ロイの言葉を受けて、名前を呼ばれることが本望だつた。願いはすでに遂げられたのだ。

瞼を閉じて、心にロイを浮かべる。ふとベルマンとの会話を思い出した。

イーリエン、それは感情を消す魔法だ。

でもロイは、感情どころか記憶を無くしてしまつた。

……ロイとも過去に『イージェン』の話をしたことがある。まだ愛し合っていた頃のロイは『イージェンを使いたい』と弱音を吐く俺に語りかけた。

——『仮にサラへの愛を無くしたとしても、俺はまたサラに恋をする』

柔らかく微笑んでくれたロイの眼差しの残光が、まだこの胸に生きている。

あの時もう一度好きになると告げてくれたロイ。

「……嘘つき」

ロイはすっかり俺を忘れて、いつかのよう俺を退けようとするのだ。

でも、いいよ。

忘れてしまつてもいい。

もう瞼を上げる力が残つていない。俺はロイを想つたまま、夢の世界へ落ちていく――――――



「ベルマンを詐かすな」

翌朝、昨日と同じく朝食の支度のためロイの部屋へ向かうと、彼は案外時間を置かず扉を開き、開口一番にそう言つた。

何のことか分からず思考が固まる。ロイの視線は背筋が震えるほど冷ややかだつた。

「俺の屋敷でベルマンを誘うんじやない」

なるほど、バルコニーでのひとときを見られていたらしい。

「昨夜、二人で酒を飲んでいただろ。ベルマンは酒に弱いんだ。彼は自ら酒を呑む男ではない。お前から誘つたんだな」

いや、あれはベルマンから声をかけてきた。しかし今のロイが俺の言葉を信じるだろか……と考え込むと、その沈黙と動揺を肯定と捉えたらしいロイは声に怒りを込めた。

「節操がないのは歓楽街だけにしてくれ。ここは娼館じやないんだ」

「……彼とは何もありません」

「当たり前だろ。関係を持っていたなら笑い話にもならん」

ロイは息を吐き捨てるように嘲笑する。

「確かにお前は美しい容姿ではあるが、そこら中で男を誘う頭なら手の施しようがないな」

笑つているけれど笑つていない。目の奥は戦慄するほど冷たかつた。規律を重んじるロイは心底から俺を嫌悪している。その怒りと侮蔑の圧で、呪いをかけられたように息が苦しくなつた。

「男を誘うためにやつてきたのか？ 俺は、使用人が足りていないとベルマンが言つていたからお前の滞在を許可しているだけだ。すぐにお前の代わりを用意する。ここを出していく準備をしておけ」

「……オーランス様、しかし」

「金か？」

言葉を遮つたロイは、憎々しげに俺へ突き刺す眼の光を強めた。

「金ならやるから出て行け。それまでは、頼むから節度を弁えてジッとしていてくれ」

「……」

「まさか屋敷にやつてきて早々、男を誑かすとはな。荷物を纏めておけ」

荷物なんか初めから持つていない。纏める前に連れて来られたのだから。

容赦ない攻撃的な言葉を浴びて頭がぼうつとする。思考に靄がかかつたみたいに頭が働かない。心をナイフで抉られたようで、吐息は流血みたいに、熱い。

「ロイ様」

そこで背後から声がした。先にロイが目を向ける。その瞬間ロイの表情が一変し、安堵に満ちていき、「オーラ」と返すその声からはついさっきまでの重苦しさが取り払われていた。

振り返るとそこには、オーラがいた。

オーラは、俺に目を向けることなくすぐ隣を通過しロイの隣へやつてくる。オーラはロイの胸に掌を当て、グッと押し込めるようにして半ば強引に部屋へと促した。オーラに弱いらしいロイは抵抗もなくされるがままだ。オーラが軽く振り向いた。長いまつ毛が、そつと煌めく。

「その物言いはあまりにも可哀想でしょう。彼も仕事でやつて来ているのですから」

素直に部屋に戻されたロイは「……そうだが」とすつかりおとなしい。オーラはこちらに向き直ると、尚も視線を合わせずに軽く頭を下げた。

「朝食の支度は僕がします。夕食の際にはまた、配膳をお願いいたします」

冷めた口調で要件だけの短い言葉を寄越してくる。朝食のカートをロイの部屋へと運びながら「では」とオーラが呟き、それを最後にロイの部屋の扉は閉まつた。

扉を閉めたオーラは一瞬だけこちらに視線を向けていた。

その目がかすかに笑っていたのを、俺は見逃していない。

「……はあ」

一人きりになつた廊下で長いため息を洩らす。怪しく笑うオーラにロイは気付いていないようだつた。もしや今回、ロイのもとへ俺を派遣したのはオーラなのか？　いや、流石に彼にそこまでの力はないはず。室内でどういった会話が交わされているのか気になつてしまふが、ここに立ち止まつているのをロイに知られたらまた面倒が起きうるのでその場から去る。

ロイは一晩経つても変わらず俺を思い出すことはなく、それどころかより嫌悪は強まつていて。昨日よりも今朝の方が顔色も悪かつたし、目元もやつれていた。ベルマンの言う通りこのままでは心配だ。ファルン国の大元帥ではあつても、ロイはまだ二十九歳。本来なら若さに漲つた活力ある年齢なのにああも病人みたいな顔をしているのは痛ましい。師匠がいたなら手つ取り早く何とかできることに……あの人はファルン一の魔法使いだ。しかし師匠は助けてくれない。

俺が何とかしなければ。ロイに活力を与える薬や魔法くらいたいものだが、ロイの傍にはいつだつてオーラがいる。ロイに近付くのはつまり、オーラの前に姿を現すことでもあるので、なるとまたロイが激怒する。

ロイが眠つてゐる最中に魔法を使うのが一番良いけれど、彼の寝室に忍び込むことは現実的でない。ロイの口振りからして、夜にまた俺が出歩けば今度こそ問答無用で屋敷を追い出されるし、寝室に侵入でもしたら殺されそうだ。

オーラと鉢合わせするのを避けつつ、ロイの体調を回復させる必要がある。

何て困難な。ひとまずロイを回復させよう。それから直ぐにでも国を出る。

ロイへの直接的な接触はできないので、間接的な方法を使いたい。となると一番容易な最善策は食事だ。俺が魔法を使いながら作つたほうが手っ取り早いだろう。ロイにとつてはいつもの食事とは違う味付けになるだろうが、それはご愛嬌あいきょうということで。そうと決めたら直ぐにでも取り掛からなくては。問題は、俺に料理の腕前はないということ。かなりレパートリーは少ないのだが……。

——果たして。

「これは何だ」

「ミートボールです」

ロイは一口齧つて、一言目に疑問を投げた。

答えたのは俺ではない。

「それは、分かるが……いつもと違うような」

「そうですか」

ロイの隣でにっこり微笑んで答えるのはオーラだ。夕食の配膳は俺が担当することになった。食事はロイとオーラが二人で取るということで、俺は同じ部屋の少し離れた位置に佇んでいる。

薬草を上手く混ぜ込みながら作る料理といつたらミートボールしか浮かばない。ベリーソースにもバレない程度に魔法をかけている。まさか二人の食事に同席する羽目になるとは思わなかつたが、

それを食すロイの反応を窺えるので都合は良かつた。

初め、部屋の隅に立つ俺を見てロイはあからさまに顔を顰めたが、オーラがいる手前、俺に暴言を吐くことはなかつた。今はこちらの姿など一切視界に入つていよいよ振る舞いである。

「もしかして、お口に合いませんでしたか？」

オーラの眉が不安そうに垂れ下がつた。ロイは即座に首を振る。

「いや、美味しい。もしや、オーラが作つてくれたのか？」

オーラは唇を閉じて微笑む。チラリと一瞬……本当に瞬きの間もないほど小さくこちらに目を向けた後、ロイに視線を戻し、また微笑みを深くした。

「はい。僕が作りました」

ロイは意外そうに瞬きし、ミートボールを見下ろす。それから目を細め「そうか」と囁いた。

……まあ、そういうことになるよな。料理を作つたのが俺だとバレないようにしてくれとベルマントに頼んだが、その味は普段の料理人の味付けとは違う。ロイは不審に思うので、ならばオーラが作つたものと偽るのが自然だ。まさか俺の料理を今のロイが口にするわけがないのだから。

「本日から夕飯は僕も作ります。ロイ様に元気を出して欲しいんです。無理をして、食べなくとも良いのですが」

オーラが優しく告げると、ロイもまた「まさか」とふつと微笑む。

「食べるに決まつてただろ。お前が作るなど珍しいからな」

それはオーラだけに向けられた微笑みだ。オーラはふわっと慈愛に満ちた笑顔で、「ありがとうございます

ございます」と返す。

ロイは、「三個ミートボールを口にすると、嬉しそうに言つた。

「美味しい。ありがとう、オーラ」

「お口に合つてよかつたです」

……まだ。オーラがその美しい微笑みをこちらに向けてくる。

俺は無言で瞼を閉じた。次に目を開くと、彼はもう俺を見ていない。それどころかオーラもミートボールを食べている。オーラが口角をニヤッと引き上げたのを見つけるも、反応しないように真顔を貫く。すると不意にロイが呟いた。

「これは、どこか懐かしい味がする」

ロイは寂しげな表情をしていた。オーラはその言葉を決して聞き落とさずに、神妙な顔つきで「懐かしい、ですか」とロイの顔を覗き込んだ。

「うまくは言えないがとても安心する味だ。懐かしいと言つてもその正体は分からぬが……」

一瞬、何か記憶を思い出してしまうのかと背筋にゾッと寒気が駆け上つた。

滋養効果のあるミートボールは、ロイと結婚していた時代に俺が幾度も作つていた料理である。俺のことを忘れてはいるのだから味も覚えていないだろうと呑気に構えていたが、ロイは何かに気付いたようで、でも、その答えを見出せていない。

「思い出せないが懐かしい。懐かしくて、とても美味しい」

「懐かしい味……、たとえばリネ・オーケランズ様の料理でしようか」

唇を噛んで感情を堪える。オーラが、かつてロイの『奥様』であった男の名を、つまりは俺の本名を出したからだ。

五年前まで俺は、リネと名乗つていた。

リネ・オーケランズ。それがロイの妻の名である。リネとして娼館で働いていた俺を、ロイが妻にし、屋敷へ連れ帰つてくれたのだ。『サラ』はロイだけが呼ぶ愛称だった。城に住む使用人たちや俺と面識のなかつたベルマンなどは、ロイの奥様の名はリネ・オーケランズだと認識している。オーラはこちらの動搖などどこ吹く風で、綺麗な微笑みのままで囁いた。

「奥様の味付けを真似してみたんです」

ロイはミートボールを見下ろす。その視線の切なさはこちらの胸が苦しくなるほどだった。

「俺は彼の記憶を思い出せないが、これは、妻の味付けなのか……」

「ご不快でしたか？」

「いや。オーラのたまの優しさは胸に沁みる」

今俺にはロイの表情や言葉に反応することは許されていない。部外者であり、忌み嫌われているからだ。

「ありがとうございます、オーラ」

「貴方の、ためですか」

ロイの言葉を受けるのは俺ではない。オーラは目線を伏せて、そつと囁いた。

次第に声が明るくなつていいのを聴きながら、俺はその場で無言を貫いていた。



それ以降も、夕食の一品は俺が担当することになった。ロイの妻として屋敷で暮らしていた頃は、食事は全て料理人に任せていたので、夕食の準備などあまりしたことがない。得意ではないが、ミートボーレルやキッシュ、スープなどはまだ人に出せるレベルだ。他に方法も思いつかないので食事を使ってロイを回復させるこの手法を採用する。ベルマンに依頼された期間は半年だが、ロイの体調次第ではそれより前にこの屋敷を去ることも可能だろう。

ロイに活力を与える魔法を施した料理は全てオーラが作ったものとされている。そもそもオーラにそれらが俺の手作り料理だと教えてはいないが、彼は気付いているようだ。たまにオーラも俺の料理を食べているのは気になるが、それ以外は特段、彼らの夕食風景で言及する点はない。

おかげさまでこの一ヶ月、ロイの体調も徐々に回復してきている。

問題は俺自身だ。

「……もう昼か……あー、くそ」

目覚めると日が高く昇っていた。気怠い体を起こす。が、同時に凄まじい頭痛で眩む。

——ファルンに帰つてきたのはイクセル師匠により『イージェン』を受けるためだつた。

それは感情を消すことができる魔法だ。ベルマンは存在を疑つていたが、実在する。

ロイも不調のようだが、俺も相当で、数年前に国を離れて以降も何とか暮らしてこれたのは、出国する際に師匠から魔法を受けたためである。しかしイージェンは基本的に期限付きの魔法だ。効果が切れてきたため再度魔法を受けるために帰つてきたのだが、師匠に頼む前にこの館へ連れてこられてしまつた。

やはりと言うべきか俺まで体調が崩れてきた。体が弱くなつたきつかけは、以前に倒れて死にかけたことだ。あれから不調が度々起きる。

倒れた原因はなんてことない。ストレスで食事が喉を通らなくなつただけ。

せめて施術を受けたいがイクセル師匠からの連絡はない。忙しい人なので無理もないが流石に薄情すぎはしないか。よりもよつて今の俺はロイの近くにいるというのに……。

日に日に具合が悪くなつていき、最近は朝の吐き気が止まらない。相変わらず俺の仕事は夜の配膳だけで、日中は自由なのが救いだ。今朝は立つていられないほどに気分が悪い。目眩ばかりで嫌になる。

原因は分かつていてる。ロイだ。彼から蔑みの視線と冷たい言葉を受けるたび心が崩れていくのが分かる。病は、氣から。仕方ないと分かつていても、ロイの振る舞いや言動の全ては刃となり俺の心を深くじっくりと抉つてくる。

「ダメだ……怠すぎる」

うつすら熱さえある。夜までに回復すればいいのだけど、と願いながらベッドへ横になり、ぼうつと考える。いざとなれば師匠も迎えにきてくれるはず。つまり今は自分でどうにかしろと暗に示さ

れているのだ。実際、俺だつてロイの体調を万全にするまでは国を出たくない。

半年でどうにかしなければならない。彼への情だけが理由ではない。

あの人はロイ・オーケランス大元帥である。

国を守るのはロイなのだ。これはファルン国への奉仕であり、返礼。

返さなければ……償いを。

強い睡魔が体を圧してきて、横たわったまま動けなくなる。夕飯までに起きなければならない。昨日のうちに今日の分のキツシュ、スペイスソーダを用意したので、食事の用意の必要はない。配膳の直前まで眠っていても大丈夫だろう。余裕を確認すると眠気が増した。

それから悪夢に引き摺り込まれるみたいに意識を失い、泥のように眠る。次に目覚めたのは橙色の夕陽が海の向こうに沈みかけた夕刻だった。

つまり、配膳の時間には遅刻した。

「今日の夕食はキツシュか」

「はい。人参とほうれん草、りんごのキツシュです」

「美味そうだな。ありがとう」

ロイ達は既に食事を始めている。俺の代わりに夕食を整えてくれた使用人に詫びを入れ、後を引き受ける。ロイとオーラは俺など存在しないかのように彼らの世界にいる。いつも通りで何よりだ。安堵するも、机に並べられた豪勢な食事のうち、ある一品に違和感を覚えた。

代わりを務めていた使用人が去つてからまだ五分と経っていない。改めてテーブルの上を眺める。

じつと凝視しているとリゾットが、一瞬だけ奇妙に蠢いた、気がした。

「お待ちください閣下」

「……なんだ」

すかさず告げるとロイが横目だけを向けてきた。

俺は一步だけ近寄り、軽く頭を垂れる。視線だけ微かに上げてテーブルを見遣つた。

「料理の品々の毒味はお済みでしようか」

ロイは険のある声で返した。

「オーラが作つた料理だぞ。文句をつける気か」

「キツシュのことではありません」

リゾットを凝視したまま応答する。今、それには変化はない。しかし俺はこの目で、見たのだ。

「そちらのリゾット、担当した料理人はどちらでしようか」

「知らん。それを持つてきたのはオーラだ」

オーラは非魔法使いだ。彼がソレに気付かなくても何ら不思議はない。

当のオーラは席から動かずに、じつと俺を観察していた。近頃視線すら合わなかつた彼だがこの状況に不穏な気配を感じたらしく、桃色の大きな目を不安そうに揺らし、俺を注意深く眺めている。彼へ軽く頷いてみせると、オーラはキュッと唇を結んだ。ロイに今のやり取りは気付かれていない。

俺は一步近づき、落ち着いた口調で問いかける。

「リゾットを拝見してもよろしいでしょうか」

「オーラを疑うのか」

「そうではありません。リゾットを疑つているのです」

「……ロイ様」

警戒するロイを窘めたのはオーラだった。オーラが静かに名を呼ぶとロイも口を閉ざす。

先に、ただの人間のオーラへ「オーラ様、離れてください」と促す。席から立ち上がった彼は素直にテーブルの端へと移動した。リゾットはまだ動かない。だがもう確信していた。これは呪いだ。

「こちら、禍々しいものを感じます」

「毒が混じつてるとでも？」

不審そうにするロイへ軽く頷き、テーブル上に視線を遣る。隅に置かれた果物皿の近くにナイフを見つけ、彼らの許可なしに手に取つた。

「何をする気だ」

ロイが張り詰めた声で問うが構わずナイフを握り直す。

腕の内側に刃先を埋め込み、躊躇いなく手前に引くと、途端に鮮血が溢れ出た。

「な、にを」

ロイが啞然と呟く。俺はスプーンでリゾットを掬い、新鮮な血の滲む腕に垂らしてみせた。その瞬間、血液に反応してリゾットが燃え上がる。青い焰越しに目を見開くロイを真っ直ぐ見つめて、断言した。

「これは、魔族の気が混じる血液に反応する呪術です。魔狼族の血を継ぐ閣下がこちらを召し上がつ

ていたら、体内から発火していたことでしょう」

勿論痛みはあるが傷は塞いでいるので体内に焰が燃え広がることはない。この特殊な焰は同じく呪術で打ち消す他ないので、デカンタの水に呪文を唱える。

しかし、即座にロイが焦った口調で叫んだ。

「オーラ、すぐに医術師を呼べ！」

……え？ あまりのことにして途切れた呪文だがすぐに再開しながらロイを見遣ると、彼はわなわなと拳を握りしめて、俺の腕を凝視していた。

俺を心配してくれた……？ ダメだ。魔法使いは心を平静にしなければならない。と、その一瞬の動搖が仇となつた。

視界の端で何かが動く。俺は、医者を呼ぶため扉へと走るオーラへ振り返つた。オーラが、果物の付近を通過しようとしている………

「待てっ！」

叫んだその瞬間、イチジクが歯を剥く。

それは途端に人間の顔ほどに膨張し、オーラへと襲いかかつた。声に振り向いたオーラがその魔物を前にして目を見開いた。くそつ、治癒が間に合わない。燃える片腕もそのままに地を蹴りまだ片手に握りしめていたナイフへ呪文を込めると、ナイフは一瞬で短刀に変化する。テーブルを飛び越えて、オーラへ襲い掛からんとするイチジクの化け物を切り裂く。だが散らばつた歯が弾けた。体当たりでオーラの肩にぶつかり、ガラス片のような歯がオーラを傷つけないよう彼に覆い被さる。